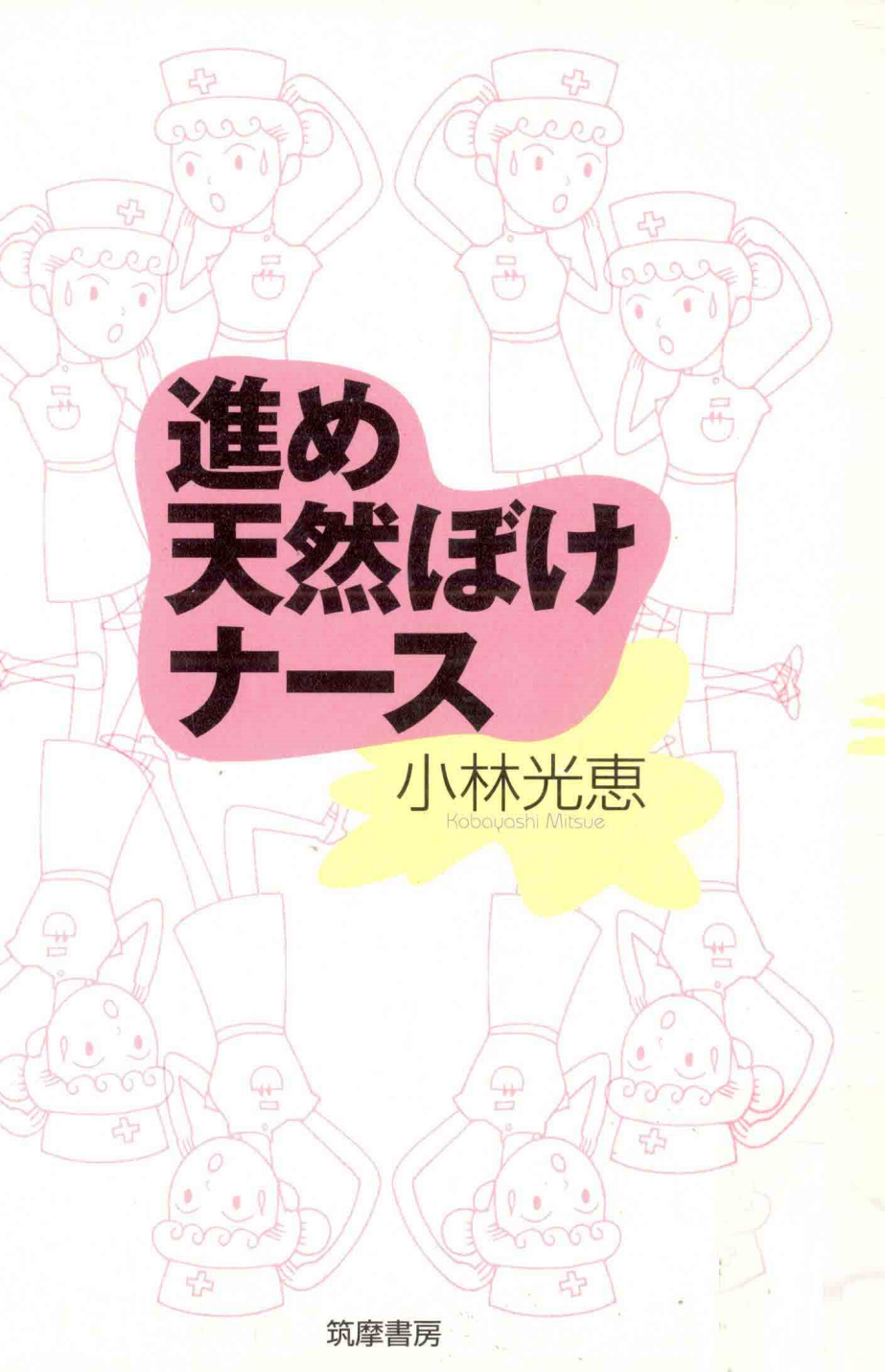


The background of the cover features a repeating pattern of pink line art. In the upper half, there are four nurses wearing traditional caps with a cross and aprons, with their hands raised in a surprised or excited gesture. In the lower half, there are four bunnies wearing similar nurse uniforms and caps, also with their hands raised. The central text is overlaid on these illustrations.

進め 天然ぼけ ナース

小林光恵

Kobayashi Mitsue

進め 天然ぼけ ナース

小林光恵

筑摩書房

小林光恵 (こばやし・みつえ)

1960年茨城県生まれ。東京警察病院看護専門学校卒業。東京警察病院、茨城県赤十字血液センターなどに勤務。出版社勤務を経て91年に独立し、編集プロダクションを創立。現在、医療・看護分野を中心に執筆者として活躍。フラココ舎代表。イベント開催や講演などに精力的に取り組んでいる。『おたんこナース 1～6』(佐々木倫子・小学館)の原案・取材の他、著書に『ぼけナース 1～3』『ナースマン』(主婦の友社)、『ナースがまま 1～3』(KKベストセラーズ)、『ナースをねえ!』『ナースのおしゃべりカルテ』、『病院はいつもパラダイス!』(幻冬舎文庫)、『まるごとナース』(共著・筑摩書房)など多数。

進め天然ぼけナース

一九九九年五月二五日 初版第一刷発行

著者 小林光恵

発行者 柏原成光

印刷 中央精版

製本 中央精版

発行所 筑摩書房

東京都台東区蔵前二一五―三
振替〇〇一六〇―八―四二二三

©Mitsue Kobayashi 1999 Printed in Japan ISBN4-480-81608-9 C0095
乱丁・落丁本は下記宛に御送付下さい。送料小社負担でお取替えいたします。
ご注文・お問い合わせも下記へお願いします。
大宮市梅引町2-604 筑摩書房サービスセンター
☎331-8507 電話048-651-0053

進め天然ぼけナース目次

第1章 天然ぼけ看護婦のトホホ

ナースキャップがツノになったら	12
おぼけのウワサが流れたら	17
飲み屋で記憶をなくしたら……	22
病院版ゴキブリホイホイに掛かってしまったら	29
病院で謎の老人を見かけたら	37
寅さんが患者さんの中に生きてたら	42
銭湯のちよつといい話の結末	51
洋服売り場の店員さんから逃れる方法	60
アパートの大家に嫌われたら	67
看護婦免許証をやぶってしまったら	76
車が二八〇度スピンしちゃったら	83

第2章 看護学校時代のトホホ

「オッジュー」と言えなくて困ったら 90

明日の昼代がなくて困ったら 99

第3章 三つ子の魂百まで 子供時代のトホホ

H氏よ、ごめん 106

大草原の少女ローラになるには 115

うちで飼ったチャコとクロの最期 119

第4章 おめでたすぎるトホホ

靴に注いだレモンサワーをすすめられたら 126

花嫁姿をザイアス博士似と言われたら 133

第5章 今も天然まつしぐら！

はじめての講演で頭真っ白になったら 142

テレビ映りが清川虹子だったといわれたら 149

都内の運転で道に迷ったら 153

思いつき泣きたくなったら 157

ゴーストが出てしまったら 164

ハイになりたかったら反復横跳び！ 170

元看護婦が考えた三十代からのダイエット 176

ハンカチ振って見送りたいになったら 183

おわりに 189

はじめに

私はこれまで数々の失敗をしてきました。

二十一歳から二年ほど、看護婦として病院に勤務しましたが、そのころの失敗はマンガ『おたんこナース』の原案となった本にそのまま書いてあります。自分の太股に注射針をさしてしまったり、心電図を逆方向につけてしまったり、自分が勤めている病院に救急車で運ばれることになって右往左往したり、などなど実際に私がやってしまったことです。

誰だって失敗のひとつやふたつあるでしょうが、私の場合、どうも性根が失敗をおかしやすいようで、ほかの人よりかなり頻度が高い気がします。天然ぼけというやつでしょうか。なにしろ性分なので、失敗は短い看護婦時代にはかぎりません。

私は普通高校から東京の看護学校（三年）に進み、その後病院に二年勤め、そのあと献血事業

の仕事をして二年したのち、出版関係に移りました。出版のほうに身をおいても、会社を替わるつなぎめなどに、看護婦の免許は有効活用しました。その間も順調に失敗を続け、三十歳前にはじめての本を書き、独立してからいままで、本を書く仕事を中心にやってきました。今も失敗道まっしぐらです。

本書に書いたエピソードは、私の数ある失敗の中のほんの一部です。

銭湯で見知らぬ人に背中を流されてしまい気まずい思いをしたり、けんかした挙げ句に思いあまって看護婦免許証をやぶいてしまったあと必要になって情けなくも再発行してもらったり、テレビ出演したら顔がむくんでいて清川虹子と言われたり、都内の運転で道に迷った挙げ句タクシーに誘導してもらったり、車がスピンして帰るほうに向いてしまったからそのまま帰ってしまったり、はじめての講演でパニックになったり、結婚式で高島田姿になったら「ザイアス博士」と言われてころびそうになったり……。

こうして見てみると、失敗したあとの学習というものがありません。三步歩くと忘れてしまうニワトリみたいな人生を送っているのがわかり、我ながらあきれてしまいます。ダメ人間のような気がしてトホホとなつてしばみます。

でも私は「失敗は天災のようなものだ」と思うことにしているので、めげません。自分だけのせいじゃなく、世の中がめぐりめぐって雨やかみなりのように発生する天災に似たシロモノだとも思うのです。他人事のように笑いとばしてしまえば楽なものです。「犬も歩けば棒にあたる」。

私も生きてりや失敗にあたるさ」なのです。そう考えれば「失敗もまた楽しからずや」となり、明るい未来が開けてきた気がして調子に乗り、失敗にもますますみがきがかかっていくという寸法です。

小林光恵

進め天然ほけナース

装丁

岩瀬聡

カバーイラスト

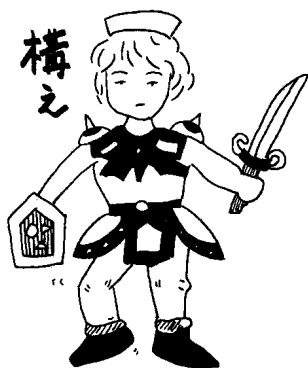
リリー・フランキー

本文イラスト

小林光恵

第1章

天然ぼけ看護婦のトホホ



ナースキャップがツノになったら

「なんかさあ、カーテンがすぐまとわりついてきて、急いでたからやみくもにそこから抜け出ようとしてもがいてたら、患者さんたちにね、赤いマントがかぶさった闘牛の牛みたいだよって大笑いされちゃった。そんなとき、ナースキャップって牛の角みたいだなーって思ったよ」

ナースステーションで、患者さんのベッドサイドでのことをおもしろおかしく、得意になって同期のナースに話していました。すると、いつのまにか婦長がそばにきていて、いきなり私のナースキャップをつまみあげます。

「あなた！ 牛の角だとかなんとかふざけてるのもいいけど、つまらないことで調子に乗ってないで。ちゃんとクリーニングしてるの？ このキャップはいつ交換したの？」

「あつ、いつだったかなー。あまり汚れないから。えーと……」

「ダメでしょ！ ナースキャップが雑菌の温床なのは知ってるでしょ。あー汚い、早くクリーニ

ングしたやつに交換してきなさいよー」

「痛！ いたたたっ、わ、わかりました、やめてください」

婦長がキャップを力任せにひっぱるので、とめてあるピンで髪が引っ張られ、私はあやつり人形のように自動的に立ち上がり、その足で新しいナースキャップに交換しに行ってきました。

ナースが頭につけている白い帽子、それがナースキャップです。ナースのシンボルなどと言われることもあります、いまではこのキャップをつけない方針の病院もちらほら出てきています。患者のみなさんには、これから医療者の職種は名札を見て確認するのをすすめます。

ナースキャップを廃止にするのは、ナースの多様な動きにおいてジャマであること、それから埃がたまったり雑菌がつきやすく不潔になりやすいこと、などがおもな理由です。ナースキャップをつけると気が引き締まるとか、長い髪をまとめやすいなど利点もあり、ナースキャップの是非については業界内でも賛否両論です。つきたい人がつければいいと思うのですが、ナースキャップも制服の一部ですから、ひとつの病院内でまちまちにはできないわけですね。私としては、頭につけたりクリーニングの交換をしたりするのが面倒だったり、たまにベッド柵にぶついたり闘牛の牛みたいになったりするのがじゃまくらい程度で、つければつけたで低い背がちよつと高くみえるような気もするし、サマになる気もするのでどちらでもいいような気がしてました。

私がナースキャップの交換を怠っていたことを知ってからというもの、婦長はこれみよがしに「コバヤシ、不潔ー」とからかうようになってしまいました。私たちの年代に合わせて「エンガ

チヨ」なんていいながら、キャーキャー騒ぐのです。婦長もいろいろと苦勞が多いわけですから、私を肴にひとふぎけしてみたかったのでしょう。

しかし、冗談とは言え、聞き捨てならないセリフです。清潔に対する熱意がナースには特別にあります。私だってナースなのですから、不名誉極まりない言われ方です。むっとしてみると、婦長は増長していくのです。私は、婦長のその口を封じなければなりません。そしてその機会をひそかにねらっていたのです。

病棟の業務には、さまざまなルールがあります。「こういうふうにする」「こうしなければならぬ」「これはしてはいけない」という決まりがいっぱいあります。そういった約束事を、婦長もなにかひとつやふたつ破っているのではないか。それを見つけて、これみよがしに指摘してやろうと思ったのです。

しばらくは尻尾を出しませんでした、ある日の午後、ついに見つけました。誰もいないナースステーションで婦長は、消毒用アルコール綿で自分の靴の汚れをささっと拭いたのです。そして、ごみ箱にずっと捨てていました。アルコール綿は、注射のときなど患者さんの皮膚を消毒したりするのに使います。消毒用アルコールで浸した脱脂綿を専用ツボに入れ、ナースステーション内に置かれています。スタッフは、ついツボから取り出して、聴診器や机など拭いてしまうことが多いのです。濡れティッシュみたいに手軽に使ってしまう。それはもったいないので「そういうふうに使ってはいけない」という約束になっていたのです。そ、それを婦長は自分の靴拭き